國際學會　トゥルファン再訪

――シルクロード美術・文化研究の第一世紀――

松井太
山部能宜

一

十九世紀末から二十世紀初頭にかけて中央アジア地域から多數の出土文獻・考古・美術資料を發掘將來した各國の中央アジア探檢隊が、當該地域の歷史・言語・文化研究の進展に果した役割は大きい。中でも、一九〇二年から一九一四年まで四次にわたって派遣されたドイツ探檢隊は、トゥルファン地域に對する重點的な調査を實施し、その成果はドイツにおける「トゥルファン研究」の學的傳統の礎となった。二〇〇二年九月、第一次ドイツ探檢隊の派遣から滿百年を迎えるのを記念し、ドイツ隊將來資料を所藏・管理する三機關すなわちベルリン科學アカデミー・トゥルファン研究所（Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften, Akademienvorhaben Turfanforschung）、ベルリン國立圖書館東洋部（Staatsbibliothek zu Berlin Preussischer Kulturbesitz, Orientabteilung）、國立ベルリン・インド美術館（Staatliche Museen zu Berlin, Museum für Indische Kunst）が協同して國際學會『トゥルファン再訪―シルクロード美術・文化研究の第一世紀（Turfan Revisited―The First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road）』を開催した。

學會會場としては主にインド美術館が用いられ、トゥルファン出土文物・中央アジア出土文物を所藏する各國を中心に、のべ二十三カ國から合計百八十三名の研究者が參加した。九月八日は參加登錄に充てられ、九月九日～十三日の五日間、十九のセッションで計七十八名が研究成果を發表した。このうち八セッションでは二部會制をとり、また發表時間は各人三十分に制限されていたが、それでも連日午前九時から午後六時までという濃密なスケジュールとなった。本稿では、全プログラムを掲げつつ簡潔にその內容を紹介することとする。ただし、當然ながら筆者ら兩名が全ての發表を傍聽することは出來なかったため、美術史關係の發表については中川原育子氏（名古屋大學）から多大のご助言・ご協力を頂戴し、またイラン學關係については吉田豐（神戶市外國語大學）・森安孝夫（大阪大學）兩氏のご教示を得た。この場を借り、三氏に深謝したい。

〇九月九日

學會初日の開會セッションでは、ベルリン科學アカデミー副總裁V. Gerhardtが歡迎の辭を述べた。貴重な文化財を保管するドイツの研究機關にはそれらを全世界の研究者に公開する責任があることを述べ、異文化交流の場であったシルクロードを國際的協力のもとに研究することにより我々自身が多樣な人類文化を理解し共存する道を摸索しなければならないとする、印象深いものであった。續い

て同アカデミー・トゥルファン研究所のP. Zieme が「トゥルファン探檢からトゥルファン校訂研究へ」と題する基調講演を行なった。

その後の二セッションでは、トゥルファン研究の草創と構築に對する諸先學の大きな貢獻を回顧すると同時に、その批判的繼承の方法が模索された。

第一セッション「百年の研究—歴史と展望」(司會：P. Zieme)

H. Walravens「A. Grünwedel—その生涯と業績」

A. v. Tongerloo「W. Bang と A. von Le Coq—ルーヴェン書簡」

L. Sander「トゥルファン出土文物研究に對する E. Waldschmidt の貢獻」

G. Hazai「A. von Gabain のベルリンでの活動」

第二セッション(司會：V. A. Livshitz)

D. Durkin-Meisterernst「イラン言語に關する F. W. K. Müller の著作」

M. Vorobyova-Desyatovskaya「ロシア科學アカデミー東方學研究所ペテルブルク支部中央アジア寫本コレクションの形成における N. F. Petrovsky の役割」

晝食を挾んだ後に第三セッションが再開された。これ以降のセッションでは個別の研究發表が中心とされた。

第三セッション(司會：S. N. C. Lieu)

A. Panaino：「マニ教宣布の戰略」：草創期のマニ教教團の宣布方略を紹介。近年學界の注目を集めている、マニ教がササン朝初期のゾロアスター教教學の形成に果たした役割とも關連するもの。

耿世民「中國におけるトゥルファン・敦煌出土ウイグル語文獻研究」：近年の中國におけるウイグル學の進展狀況を紹介。

この日のセッション終了後、參加者には、インド美術館の特別展「トゥルファン探檢百周年—シルクロード美術・文化の跡付け」を翌九月十日の會期初日に先んじて觀覽する機會が與えられた。國立博物館總館長 P.-K. Schuster による歡迎の挨拶の後、インド美術館館長 M. Yaldiz が案內役を務めた。この特別展は、佛教壁畫斷片や佛像を中心とする通常展示品に加えて、諸言語の『金光明經』寫本や對譯語彙集などの文獻資料をも展覽に供し、トゥルファン地域やシルクロード上での文化交流の諸相を一般に紹介するものであった。特別展觀覽の後、インド美術館による歡迎レセプションが催された。

〇九月十日

第四セッション(司會：J.-U. Hartmann)

K. Wille「イスタンブル大學圖書館所藏の中央アジア出土サンスクリット語斷簡」：かつて山田信夫・百濟康義が調査したイスタンブル寫本のうち、ブラーフミー寫本の內容同定を中心とする報告。

C. Gumbrecht「ドイツ・トゥルファン探檢隊への中國政府の通行許可證」：ドイツ探檢隊に交付された通行許可證を紹介。探檢隊の調査目的について中國當局が必ずしも無知でなかったことを示した。

荒川正晴「冥界への通行許可證—トゥルファン漢人の宗教信仰の變遷」：隨葬衣物疏から功德疏へというトゥルファン墳墓の葬禮文書の變遷を指摘、その上で東傳した佛教と儒教・道教とが融合し

た冥界觀が麴氏高昌國時代に構成され、唐西州時代には淨土信仰を中心とする佛教的冥界觀がより優勢となったと結論。

第五セッション（司會：森安孝夫）

武内紹人「歸義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」：チベット支配期以降の敦煌出土チベット語文書、さらにはカラホト・エチンゴル出土文書の檢討を通じ、吐蕃帝國崩壞後から古典期に至る書體や文書形式の變遷を跡付けた。

G. Kara「ベルリン所藏古チベット文『千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無碍大悲心陀羅尼經』斷簡」：トゥルファン出土チベット語斷簡（*Berliner Turfantexte* X, Text Nr. 24）の原典比定。

松川節「モンゴル語譯『北斗七星延命經』に殘存するウイグル的要素」：ウイグル佛典を翻譯原典と明記するモンゴル語佛典が未だ知られていないという問題を提起した上で、標記の『北斗七星延命經』がチベット語ではなくウイグル語を原典として翻譯されたことを對校テキスト分析を通じて論證。

V. Rybatzki「中期モンゴル文アレクサンダー傳說の言語學的特殊性」：トゥルファン出土の標記寫本について、同時期のモンゴル語文獻との大きな差異として佛教術語が見えない點を指摘しつつ、音韻・語形・統語・語彙論的に檢討。

第六セッション（司會：Zs. Gulácsi）

梅村坦「ウイグル文契約文書 SI 4bKr. 71 の提示」：ペテルブルク所藏の標記文書の校訂テキスト・譯註を提示し、奴隷賣買および銀貸借に關連する社會經濟史的問題を指摘。詳しくは『內陸アジア言語の研究』一七（二〇〇二）所收の梅村論文を參照。

坂本和子「トゥルファン出土の高級織物斷片二點—西から東への織物流通の證左」：織物銘文や製法・技術、さらにウイグル文書・アラビア語史料の檢討から、大谷探檢隊收集の三日月文錦とドイツ隊收集の綿ベルベットがいずれも西方からトゥルファンに傳來したと指摘。

Ch. Bhattacharya-Haesner「トゥルファン寺院幡畫の圖像學的特徵」：マニ教供養圖や被帽地藏十王像など、インド美術館所藏の未發表幡畫三點を紹介。なお發表者の編になる *The Central Asian Temple Banners in the Collection of the Museum für Indische Kunst, Berlin*（Berlin, 2003）が最近刊行され、本發表の三點を含む多數の幡畫資料が公開されたのは朗報。

第七セッション（司會：A. Panaino）

S. N. C. Lieu「敦煌とトゥルファン」：漢文マニ教典『摩尼光佛教法儀略』を中心に敦煌・トゥルファン出土マニ教文獻にみえる宇宙生成論を紹介。

J. Ebert「トゥルファンのマニ教衣服描寫における後期古代的影響」：高昌故城寺院址Kから出土した木綿の斷片（MIK III 6606）をマニ教寫本・壁畫に描かれたマニ教の高僧（あるいは神）の衣服と比較し、實際にマニ教徒が使用した衣服の斷片（位階を表すワッペンの類か）と斷定した。

M. Hutter「マニの『巨人の書』—內容復元にむけての試み」：マニ教の七聖典の一つである『巨人の書』について、中世ペルシア語譯・ウイグル語譯さらにクムラン出土のキリスト教の外典と照合し、斷簡の內容と構成の補訂を試みた。

〇九月十一日

第八セッション

・第一部會（司會：M. Yaldiz）

今回の學會を主催した三機關は、トゥルファン現地で研究を進める中國の諸機關・研究者との協力關係を促進することを企圖し、多數の中國人研究者を招待した。本部會ではそのうち新疆龜茲石窟研究所に所屬する二名が發表を行なった。

霍旭初「キジル石窟の美術的樣式と他遺跡にみえるその影響」：キジル石窟の構造および壁畫の內容の諸特徵を概觀し、キジル石窟にみられる特徵・技法が雲岡・敦煌・河西回廊・カラシャール・トゥルファン等の諸石窟に及ぼした影響を檢討。

趙莉「インド美術館所藏のキジル石窟壁畫の正確な起源の檢證」：ドイツ隊將來のキジル石窟壁畫の本來の所在地の記載が『中國石窟・キジル石窟3』（平凡社、一九八三）等の中國・日本刊行のカタログ類ではしばしば不正確であることを指摘し、現地調査に基づく訂正結果を示した。現地を容易に參看できる地元研究者ならではの强みを生かした發表であったと言えよう。

・第二部會（司會：J. P. Laut）

L. V. Clark「テュルク語マニ教貝葉寫本の分析續報」：發表者がかつて校訂テキストを提出した標記寫本についての補訂案を報告。特に奧書と思しき部分に töpüt qatun「チベットの可敦」という人物を讀みとった點が注目される。

M. Erdal「テュルク語における i と ı の區別」：オルホン碑文とウイグル語文獻を材料に、前舌・後舌音の區別を音韻論・表音論的に考察し、外來借用語についても區別がみられることを主張。なお『內陸アジア言語の研究』一七（二〇〇二）所收の Erdal 論文も關連する。

S. Tezcan「古代テュルク語の部族・民族・臣民をさす呼稱」：「部族・民族・臣民」を意味する bod, bodun などの數語について、語源とその語義變化の展開を追った試み。

第九セッション

・第一部會（司會：P. Zieme）

西脇常記「二十八宿に基づく日月蝕・地震占書」：出口常順舊藏の漢文文書斷簡がベルリン所藏文書と接合することを指摘し、トゥルファン地域を媒介とする中國文化・インド文化の交涉を論じた。なお西脇『ドイツ將來のトルファン出土漢語文書』京都大學學術出版會、二〇〇二、一五四～一六五頁も參照。

王丁「二言語併記文書斷簡 Ch 3586」：標記斷簡を契丹字・ウイグル字の兩言語併記文書として紹介。質疑應答では契丹字とみなせるかについて贊否が分かれたものの、大いに關心を集めた。

・第二部會（司會：M. Vorobyova-Desyatovskaya）

L. Feugère「トゥムシュク—佛・獨の發掘よりみたその重要性」：ガンダーラのハッダの樣式に類似した彫刻が多數發見されたこと等、標記遺跡の文化史的重要性を指摘。

M. Maggi「コータン語文獻史における文書 T III S 16 の重要性」：『ザンバスタの書』の一部である標記文書の檢討等により、本書の成立年代を五世紀もしくは六世紀初めまで遡らせることを提案。該書をコータン語佛典のうち最初期に屬するものとし、一行に四詩句を書く方式がコータン出土のガンダーリー語『法句經』（一～三世紀?）と一致している點にも注意を喚起した。

この日の午後のセッションは、ベルリン中心街のベルリン科學アカデミーに會場を移して行なわれた。

第十セッション（司會：B. Gharib）

吉田豐「ソグドの昭武姓の起源とその周邊」：從來定說の無かった「昭武」の原語を、ペンジケント出土貨幣銘文やトゥルファン・敦煌出土文書中にみえるソグド人名の cm'wk［čamuk ～ čəmūk］に求める創見を披露。

N. Sims-Williams「ベルリン所藏のバクトリア語寫本」：從來充分に解讀され得なかったベルリン所藏バクトリア語文獻について、アフガニスタン新發現のバクトリア語寫本の解讀成果をもとに再檢討。草書體のギリシア文字の解讀過程を概觀した。

J.-U. Hartmann「シルクロードの佛教—アフガニスタン及びトルキスタン北道の梵語佛典の關係について」：近年學界の注目を集めるアフガニスタン寫本について、これまで中央アジア寫本には確認されていない貴重な梵本を多く含む點をはじめ、その重要性を改めて指摘。

第十一セッション「デジタル化・新媒體」（司會：S.-Chr. Raschmann）

R. Shaghaghi「ベルリン・トゥルファン文獻のデジタル化」：ベルリン科學アカデミーによるデジタル化計畫（http://www.bbaw.de/forschung/turfanforschung/dta/index.html）の紹介。すでに漢文・ウイグル兩語文書、キリスト教ソグド語、コータン語、トゥムシュク語文獻についてはウェブサイトでのデジタル畫像データ公開を完了し、順次ウイグル語・イラン語その他の全てのベルリン所藏資料に及ぶという。この發表での「公約」通り、二〇〇三年三月にはウイグル語文獻の公開が完了している。

J. Gippert「TITUS テキストデータベースのイラン語・トカラ語資料」：インド語・中世イラン語文獻の包括的データベース化を進めているフランクフルト大學の TITUS（Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien）プロジェクト（http://titus.uni-frankfurt.de）の紹介。ユーザが利用するシステムの差異により生じる不具合を徐々に改善しつつあるとのこと。

S. Whitfield「オンラインでのシルクロード文獻・遺物・繪畫・寫眞の結合」：大英圖書館の「國際敦煌プロジェクト」研究班が進めるウェブサイトでの敦煌文書・トゥルファン文書閲覽システム（http://idp.bl.uk/ManuscriptSearch）の紹介。言語・文字・出土遺跡や種々のカタログ番號などから個々の出土資料の畫像データを讀み出しさらに同遺跡出土の關連資料をも參照できる多元的なシステムを實演し、多くの聽衆の感嘆を呼んだ。

この第十一セッションでは、情報のデジタル化を進めて廣く研究者に情報を提供し、同時に貴重な出土資料の保護保全を圖ろうという、英・獨兩國の所藏機關のオープンな姿勢が印象的であった。このセッション終了後、ベルリン科學アカデミーによる懇親會が催された。

〇九月十二日

第十二セッション

・第一部會（司會：M. L. Carter）

李崇峰「キジル石窟の本生圖」：キジルのジャータカ壁畫を構圖及び內容面から檢討し、ガンダーラよりむしろインドと密接な關係にあったことを論じた。なお、發表者は北京大學考古文博學院の副教授である。

S. Dietz「トゥルファン出土のサンスクリット語阿毘達磨斷

簡」:「六足發智」および『大毘婆沙論』『倶舎論』等の有部アビダルマ文獻の梵文寫本の現存狀況を詳細に調査して報告。

M. Rudova-Ptchelina 「誓願—年代と主題」: Le Coq がベゼクリク石窟から將來した、從來誓願圖と見做されてきた壁畫に對し新解釋を提示した。卽ち、畫面中央の佛を阿彌陀佛とし、この壁畫を描かせた人物が阿彌陀佛の教えに從って佛陀となることを表わした場面として解釋するのである。

・第二部會(司會:Chr. Reck)

J. BeDuhn 「トゥルファン出土マニ教齋食讃歌」: マニ僧が齋食の前に歌うパルティア語讃歌の校訂研究。

A. Esmailpour Motlagh「マニ教宇宙生成論における Rōšnān Xwārist の役割」: 從來不明瞭であったマニ教神格 Rōšnān Xwārist について、中世ペルシア語・パルティア語・シリア語・アラビア語・コプト語資料の比較から檢討。

B. Marshak 「ソグディアナの壁畫とトゥルファン文獻の比較」: ペンジケントなどの宮殿址の壁畫にみえるモチーフを、『パンチャタントラ』『シンドバードの書』『イソップ物語』などトルファン出土のマニ教說話資料の內容と比較しつつ解釋。圖像學・文獻學の成果を連關させた巧みな發表であった。

第十三セッション

・第一部會(司會:M. Hutter)

St. Zimmer 「印歐學に對するトゥルファン收集品の意義」: トカラ語の在證、印歐文化觀の變更、中世イラン語資料の將來などを中心とした概觀。

D. Weber 「シルクロード出土のパフラヴィー文書」: 中央アジア發現のパフラヴィー語資料についての報告。特に青海で最近發見された絹織物に織り込まれたパフラヴィー語銘文の紹介が注目された。

J. Hamilton 「ウイグル文棒杭文書についての補說」: 森安孝夫によるインド美術館所藏第三棒杭文書の校訂案(In: *De Dunhuang à Istanbul*, Turnhout, 2001, pp. 183-199)に對し、發表者所藏の赤外線寫眞を利用して補訂案を提示。セッション會場では特別に棒杭文書現物も披露され、テュルク文獻研究者らが活發に議論を交えた。

S. G. Kljashtorny 「マニ教文書 TII D と Irq bitig 第一九節」: 敦煌出土のテュルク語占卜書 Irq bitig をマニ教文化に屬するものと位置づけた上で、その第一九節にみえる白馬を解釋。

・第二部會(司會:A. van Tongerloo)

Abudrasul Idriss 「トゥルファン盆地での先史時代の遺物—交河溝西臺地の舊石器時代遺跡」: 一九九五年に新疆文物考古研究所が發掘した舊石器時代の石器につき報告。洪積世後期の地層からも遺物が發見された點が注目される。

M. L. Carter 「トゥルファンと葡萄—トゥルファン美術にみえる葡萄栽培と葡萄酒」: トゥルファンにおける葡萄栽培の歷史をたどり、中央アジア諸宗教(ゾロアスター教、マニ教、ネストリウス派キリスト教、佛教)において葡萄のもつ象徵的意味を考察。

G. Mikkelsen 「トゥルファン出土漢文マニ教文獻斷簡」: 近年 Th. Thilo および吉田豐によってそれぞれ公刊された漢文マニ經典について術語・語彙を比較檢討し、漢譯システムの發展を追った。

第十四セッション

・第一部會（司會：S. Tezcan）

Israfel Yusuf「トゥルファン出土古テュルク語『藥師經』斷簡」

Kahar Barat「プリンストン大學所藏敦煌出土ウイグル語文獻」：J. O. Bullitt（*Gest Library Journal* 3, 1989）が紹介した標記文書をカラースライドで提示しつつ再檢討。

J. P. Laut「古テュルク語『彌勒會見記』・『十業道物語』研究の現狀」：『彌勒會見記』のベルリン所藏斷簡のカタログ化がほぼ完了したこと、また庄垣內正弘らによるペテルブルク所藏『十業道物語』の公刊に伴い、ベルリン所藏斷簡の同定も大いに期待されることを指摘。

・第二部會（司會：S. N. C. Lieu）

S. K. Abe「トゥルファンの北涼塔に關する再檢討」：インド美術館所藏のトゥルファン將來の小石塔を、甘肅地方發現の北涼期の類似例と詳細に比較檢討。これらの作例の中には願文が刻まれていないものがあり、職人が寄進者の依頼を待たずに作成した場合もあったことを示唆している。

J. Baker「毘沙門天と四天王—トゥルファン內外の美術における守護神像の變遷」：アスターナ第二〇六號墳（張雄墓）出土の毘沙門天像と思われる精美な天王像の意味づけ。この像は唐の皇室工房で製作され、被葬者の生前の忠誠を嘉して與えられたものと推測。

百濟康義「ウイグル語・チベット語譯『栴檀佛像中國渡來記』」：チベット大藏經所收『栴檀佛像中國渡來記』は傳優塡王造の栴檀瑞像が中國に將來された過程を傳えるもので、奥書によれば元代にウイグル佛僧により漢文からウイグル語譯を經てチベット語譯されたという。發表者は漢文『栴檀佛像記』『優塡王所造栴檀釋迦瑞像歷記』との對應關係を發見し、藏文テキスト中の地名・人名の同定を試みた。

第十五セッション（司會：M. Erdal）

森安孝夫「絹布・棉布から銀へ—東方シルクロードにおける交換手段の變遷」：通貨・交換手段としての銀が在證されるウイグル語世俗文書が全てモンゴル期以降に比定されることを指摘し、宋代中國から遼・金・西夏を通じて銀が西方に流出したという愛宕松男らの舊說を否定しつつ、銀の貨幣的使用がモンゴル期に擴大することを論證。

O. F. Sertkaya「ウイグル語金錢關係文書にみえる人名・地名について」：ベルリン舊藏文書の R. R. Arat 將來寫眞を提示しつつ、當該文書に見える人名要素について檢討。

松井太「ウイグル語・モンゴル語文書にみるモンゴル帝國の度量衡統一」：モンゴル期の出土文書にみえるウイグル語・モンゴル語の計量單位が中國・イランと單一の體系に收斂することを解明。貨幣單位（重量單位）と併せ、モンゴル諸政權がユーラシア東西交易の活性化を意圖して度量衡統一政策を進めたと結論した。

このセッション終了後、參加者には、インド美術館の地下收藏庫に入室し、通常は展示公開されていないトゥルファン出土資料を實見する機會が與えられた。壁畫斷片や考古遺物を中心とする多數の未發表資料に觸れ、新たな研究の手がかりを得た參加者もいたことと思われる。

〇九月十三日

第十六セッション

・第一部會（司會：L. Feugère）

山部能宜「トヨク第四二窟の禪觀僧壁畫の檢討—漢文禪觀經典の成立と關連して」：漢文禪觀經典の成立地を解明するための一つの手がかりとして、標記壁畫を禪觀經典の記述と比較し、そこに述べられているような觀想が實際にこの石窟において行われていた可能性が高いことを論じた。

晁崔山「最近一世紀における東トルキスタン佛教遺跡の變化」：佛教遺跡と石窟寺院をめぐる様々な環境變化について、二十世紀初頭のドイツ隊調査時の狀況と二〇〇一年九月の狀況とを比較對照。

柳洪亮「トゥルファンにおける古代遺跡、考古學的發掘とその公刊」：遺跡の保存・修復狀況、トゥルファン博物館のコレクション、今後の展望について紹介。なお二〇〇三年四月、柳氏が交通事故のため急逝されたとの報に接した。謹んでご冥福をお祈りする。

・第二部會（司會：O. F. Sertkaya）

高田時雄「トゥルファンにおける漢語」：トゥルファン出土の切韻系の韻書を網羅的にリストし、トゥルファン地域で韻書が使用される文化史的背景を論じた。とくに西ウイグル國時代にも『切韻』が使用されたという指摘は、下記の庄垣內の報告との關連でも注目される。

K. Röhrborn「古テュルク佛教における在家佛教と菩薩道」：彌勒信仰がテュルク佛教初期から後世に至るまで根强く遺存したと指摘。

庄垣內正弘「ウイグル語で漢字はどのように讀まれたか」：發表者が近年精力的に進めているペテルブルク所藏ウイグル字音寫漢語文獻や漢字交じりウイグル語文獻の研究を通じて、ウイグル字音やウイグル人の漢文訓讀などの現象を詳論した。

第十七セッション

・第一部會（司會：N. Sims-Williams）

B. Gharib「ゾロアスター教とマニ教における智」：二教における「智」の宇宙論・神學的位置づけを比較檢討。

Zs. Gulácsi「マニ教裝飾本におけるテキストと圖像」：マニ教寫本においてテキストの內容と挿繪との關係はかなりルーズであり、その時々の目的により比較的自由に裝飾を施していたようで、挿繪がテキストの內容を視覺的に說明するとは限らないと指摘。また既知のほとんどの例では、寄進者の名前が書かれた箇所に挿繪が描かれているという。

E. Morano「トゥルファン出土中世イラン語マニ教呪術文獻」：從來充分に認識されていない呪術文獻を神學文獻中に同定し、テキスト校訂・翻譯を試みた。

・第二部會（司會：S. Whitfield）

榮新江「且渠安周碑文とトゥルファンの大涼王國」：標記碑文の新釋讀を提示しつつ、同碑文がその後のトゥルファン漢文碑文の典型となったことを指摘。また、大涼が河西の佛教文化をトゥルファン地域にもたらしたことをスライドを用いつつ紹介し、そのトゥルファン支配の歷史的意義を强調した。

E. Franco「Spitzer 寫本（SHT 810）—クシャーナ期の哲學的論書」：標記寫本の梗概を紹介。このテキストは漢譯の存在しない有部系アビダルマ文獻であり、その重要性は夙に Lüders 等によって指摘されながら、その全容は未だ公表されていない。發表者は既

にこの文獻の校訂作業を終え近く公刊の豫定という。その公刊が待たれるところである。

L. Tugusheva「早期中世ウイグル語韻文文獻斷簡」

Abdurishid Yakup「ウイグル語Candraprabha斷簡について」：ベルリン・ペテルブルク所藏斷簡を中心に、Candraprabha說話をサンスクリット語・パーリ語・漢語版と比較檢討。

百濟康義「ペゼクリク壁畫のセラミック復元」：現在龍谷大學で進行中の計畫に關するエキストラのスライド發表。第二次大戰中の爆擊で破壞されたベルリン舊藏のペゼクリク壁畫を、A. von Le Coq, *Cholscho* 初版本（Berlin, 1913）に基づき日本のセラミック製造技術を利用して復元するというもの。なお、この復元壁畫は龍大主催の大谷探檢隊派遣百周年記念國際シンポジウム『シルクロードの文物と現代科學』（二〇〇三年九月八日～十三日）で展示される豫定である。

第十八セッション

・第一部會（司會：B. Marshak）

V. A. Livshitz「六世紀初頭のソグド人マニ教司教Sānak」：タシュケント近郊で出土した印章（bulla）を、銘文の解釋からマニ教僧侶のものと提案。なお詳細は *Bulletin of Asia Institute* 近刊號に發表豫定とのこと。

I. Yakubovich「イラン語語彙收集におけるトゥルファン文獻の價値」：トゥルファン出土文獻中の中世ペルシア語・ソグド語語彙 *žitük*, *γutē*, *δastβār* の語源について新提案。

・第二部會（司會：M. Maggi）

G.-J. Pinault「トカラ語とトゥルファン研究」：トゥルファン地域の「トカラ・ウイグル文化」の存在を措定。またトカラ語文化とガンダーリー語文化との關係について、ベルリン所藏の兩語併記文獻から檢討。

K. T. Schmidt「インド・トカラ語文獻」

D. Maue「Konowの新字Nr. 10」：非インド語文獻に用いられる新種ブラーフミー文字のうち、S. Konowが唇軟口蓋の摩擦音とみなしたNr. 10について新解釋を提示。

第十九セッション（司會：K. Röhrborn）

Ablet Semet「古テュルク語玄奘傳第一卷の觀察」：寫本の由來、及びテュルク文註釋書中の對應箇所を紹介。

M. Ölmez「古テュルク語の新語源」：オルホン碑文や玄奘傳にみえる不明語について、原テキストの再校訂から解決案を提示。

以上の全プログラムを終了した後、ウンター・デン・リンデン通りのベルリン國立圖書館第一分館で最終日の懇親會が催された。

翌九月十四日にはポツダム近郊のKrongut Bornstedtへのエクスカーションも催され、あいにくの雨模樣ではあったがくつろいだ雰圍氣のもとで參加者の交流が深められた。

今回の國際學會を概觀すれば、一部の發表には概論・現狀紹介にとどまるものや、全て口頭によるなど聽講し難いものもあったとはいえ、大多數の發表者は各自の專門分野—歷史學・言語學・文獻學・考古學・美術史・佛教學・テュルク學・モンゴル學・イラン學・インド學など—における最新の到達點を示し、この一世紀間のトゥルファン研究の蓄積・發展を參加者に實感させたと言える。トゥルファン文物資料の物質的・言語的・文化的・宗教的多樣性に鑑みれば、今後の研究の深化がさらなる細密化・精緻化・個別分散を

伴うことは必然であるが、同時に廣く他分野の研究動向に目を配ることも缺かせない。その點、幅廣い分野の研究者がトゥルファン研究に照準を合わせて一堂に集った本學會の意義はまことに大きく、トゥルファン研究の第二世紀の劈頭を飾るに相應しいものであった。

なお、各研究發表者は發表內容を英語ないし獨語で論文化して二〇〇二年末までに提出するよう要請されている。論文は學會の名稱でもあった *Turfan Revisited* と題する論文集にまとめられ、遠からず Dietlich Reimer Verlag (Berlin) から出版される豫定である。各發表の詳細については是非この論文集を參照されたい。